様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２６０１

研究課題名（和文）20世紀前半における英国黄禍論小説と日本のアジア主義小説の比較文学的研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of the Yellow Peril and Japan's Pan-Asianism

研究代表者
橋本　順光（Hashimoto, Yorimitsu）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：８０３３４６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：黄禍論とアジア主義の言説が日英で複雑に転用される相互関係を、以下の２つの局面において明らかにすることができた。第１に小説の転用。日英同盟の更新に水を差した英国の黄禍論小説や、英国の帝国主義を転用した日本のアジア主義小説などを発掘した。第２に図像の往還。風刺漫画やプロパガンダのポスターなどの転用、インドをめぐるステレオタイプな図像の成立を指摘した。それらをふまえ、英国の諜報活動報告を調査し、アジア主義をめぐる複雑なネットワークの一端を解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
岡倉覚三とタゴールというアジア主義を牽引した思想家が、共にインドでディキンソンの『中国人の手紙』に啓発され、東洋的価値観を形成していた可能性が明らかになった。日本のアジア主義的な言説や小説の英国起源と同時に、英国の代表的な黄禍論小説である『キモノ』(1921)が、皇太子時代の昭和天皇の訪英時期を狙って刊行された可能性が高いことが判明し、言説の相互関係と文脈を新たに解明することができた。あわせて、大川周明やR. B. ボースなどのアジア主義者を内偵していたH・P・シャストリの活動報告を英国公文書館で調査し、アジア主義者の知られざる一面を発掘することができた。

研究成果の概要（英文）： The Yellow Peril and Pan-Asianism are two sides of the same coin. Villains like Fu-Manchu in oriental novels spurred the justification of Japan’s imperial fictions. Even objections to racial prejudice were appropriated in order to mould and praise Eastern spiritualism. Lowes Dickinson’s Letters from John Chinaman, which was first published anonymously in 1901, for instance, had been considered a Mandarin’s authentic manifesto against European materialism. This pamphlet hugely inspired both Rabindranath Tagore and Kakuzo Okakura, later idols and ideologues of Pan-Asianism, to sophisticate the idea. And then actual political situations became stranger than the Yellow Peril or Pan-Asianism novels. In the 1910s, Indian revolutionaries had covertly retreated to Japan, but British agents such as Hari Prasad Shastri closely reported their activities. Interestingly, mutual distrust among Japan, Britain and India incited the popularity of spy novels concerning the Pan-Asian plot.

研究分野：比較文学

キーワード：黄禍論　アジア主義　岡倉覚三　タゴール　風刺画　クラ運河　タイ　末松謙澄

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「世紀転換期の英国における黄禍論とその図像に関する比較文学的研究」（基盤 C, 2013-2016）の成果として、英国の黄禍論小説と日本のアジア主義小説の共犯的ともいえる相互影響の一端が判明した。黄禍論ないし黄禍論的な小説についての研究はオリエンタリズム研究や政治学の観点からのものが多く、日本のアジア主義小説との関連を考察する例はほとんどみられなかった。

２．研究の目的

第１に、英国の黄禍論小説と日本のアジア主義小説の相互交渉を具体的に明らかにする。第２に、黄禍論やアジア主義に関する図像を発掘し、日英間の往還や転用を明らかにする。第 3 に、アジア主義をめぐる英国政府の調査・諜報活動を発掘し、言説や小説との関係を明らかにする。

３．研究の方法

第１の目的については、関連する日英の古書・研究書を購入ないし閲覧し、調査を行う。第 2 の目的については、該当時期の雑誌や新聞などの資料を購入ないし閲覧し、調査を行う。特に英国の『評論の評論』誌における世界の風刺漫画が掲載されたコーナーを活用する。第 3 の目的としては、英国の公文書館および日本の外交史料館を調査し、双方の資料を照合する。

４．研究成果

成果は、編著 5 件、論文 8 件、記事などの短文 12 件、口頭発表 18 件である。主題と機会に応じて日本語ないし英語で発表し、口頭発表は基本的に活字化を前提としている。

3 つの研究目的のなかで第 1 については、以下の 4 点が挙げられる。

論文⑧
満洲事変以降、英米に対抗する形で派遣された暹羅派遣経済使節(1936)の唯一の成果といえるクロヒョウについて、上野動物園への寄贈と脱走の経緯、そしてその表象と影響を論じた。脱走に際しては、南進論を牽引した南洋一郎の『吼える密林』(1933)が連想されていたことを指摘すると同時に、その南の小説は米国のフランク・バックの実録小説を下敷きにしていることを明らかにした。一方、クロヒョウの脱走は、先行する猛獣脱走事件とあいまって、同じくタイからやってきた象が戦時下に殺処分される遠因となった可能性を指摘した。

論文⑥
アジア主義の言説が日英で転用される相互交渉の例を発掘した。ニヴェディタの書簡から、インドに滞在中の岡倉覚三（天心）やラビンドラナート・タゴールが、ロウズ・ディキンソンによる『中国人からの手紙』(1901）を実在する清朝高官の手紙と誤解していたことを指摘した(これは当時、珍しいことではなかった)。それだけでなく、感銘を受けた岡倉は草稿まで執筆していたことが判明した。呼応するように、ディキンソンもまた岡倉の『茶の本』(1906)を読んで岡倉に強い関心を抱き、1912 年から 1913 年にかけての東洋旅行の際に、日本で晩年の岡倉に面会したことも明らかとなった。後にディキンソンは、吉田健一のケンブリッジでの年長の友となり、吉田も『中国人からの手紙』の著者としてディキンソンのことを回顧しているが、アジア主義をめぐる両者の交錯はすっかり忘れられていた。

論文③
義経が後にジンギスカンになったという荒唐無稽な説が、英語圏では黄禍論小説として、日本ではアジア主義の物語として、それぞれ流通していった過程を解明した。江戸時代の義経北行伝説を発展させ、ロンドンに駐在していた官僚の末松謙澄が、源氏物語の英訳と同時期に英語で刊行した『ジンギスカンの正体』(1879)がその発端となった。小谷部全一郎は、末松の邦訳を転用して、この説を世に広めた。義経ジンギスカン説は、満洲で積極的に宣伝に使われ、川端龍子の絵画や山中峯太郎の冒険小説でも補強されており、同様の説は、米国映画『フーマンチューの仮面』(1932)でも利用されている。後に小谷部は霊媒師まで援用して自説の正しさを主張したが、これは実のところ、義経の霊がジンギスカンとなったことを告白して大東亜建設の夢を託す高浜虚子の新作能「義経」と共通している。こうした夢幻能と同じ構造は、義経ジンギスカン説をめぐる物語に共通しており、同じ語りが繰り返されていることを強調した。

論文①
幸田露伴が使用した英語文献の典拠を指摘し、その流用や利用を明らかにした。少年文学ではほぼ翻訳に近いものが多い反面、心霊主義や神智学に関する著作に着想を受けて、東洋の事

例を発掘しして再評価する特徴が判明した。ヨガについて解説したキャリントンの著作が、露伴の「仙書参同契約」(1941)の典拠であり、そこからインドのヨガと中国の道教の類似を指摘していることが明らかとなった。なお露伴がキャリントンを参照していることは、下記の論文⑦で判明した。

第 2 の目的については、以下の 7 点が挙げられる。

論文⑦
長く欧米で謎として過剰に神秘化されてきたインディアン・ロープ（ないしヒンドゥー・ロープ）の魔術について、Peter Lamont の懐疑主義的な研究に欠けていた神話化と物語化の過程を明らかにした。なお、こうしたインドの魔術や見世物は、インド航路の発達によって日本でも大衆化する基盤が形成されており、そのことは図書③で指摘した。
インディアン・ロープ・マジックとは、天空に伸びゆくロープを少年が昇り、ばらばらに切り刻まれた落ちてきた後で、生き返るという伝説の見世物である。19 世紀後半、ヘンリー・ユールがマルコ・ポーロの『東方見聞録』詳注版にて、14 世紀にイブン・バットゥータが中国で見たという魔術は、17 世紀イギリスのメルトンがバタヴィアで見た大道芸と一致すると指摘し、さらに同様の記述が 17 世紀の『聊斎志異』に見られることが英訳により判明した。その後、この魔術をインドで見たという目撃例がたびたび寄せられ、アメリカではカメラで撮影したという捏造記事まで書かれた結果、魔術の正体は集団催眠という説が盛んになる（この説明を鵜呑みしてそのまま紹介したのが幸田露伴である）。戦後、トリックが明らかになった後でこそ、インディアン・ロープ・マジックはいくつもの漫画で援用されており、なかでも手塚治虫は『ブッダ』のなかで効果的に描いていることを指摘した。

論文④
19 世紀後半、蛸は、移民とりわけアジア系移民の象徴として煽情的に描かれてきた。海から上陸し、複数の触手で社会に脅威をおよぼすクラーケンのような怪物として、黄禍論の宣伝で使用されたのである。こうした 19 世紀後半に頻出する蛸をめぐる図像の往還と転用を跡付けた。図像の転用としては、木村兼葭堂の『山海名所図会』にある滑川の大蛸の絵が、英国の博物誌でクラーケンのような巨大な蛸が実在する例として掲載されていることを指摘した。一方、南下のために各地に侵攻するロシアを大蛸になぞらえた風刺画にちなみ、日本で宣伝のために作られた「滑稽欧亜外交地図」が、日露戦争に際して日本の大義名分を喧伝するためにステッドを訪問した末松謙澄によっておそらく手渡され、それが『評論の評論』の世界の風刺漫画コーナーで掲載された可能性を指摘した。一方で、近年では多文化主義の象徴として、陸に上がって八面六臂の活躍をする移民の表象として、肯定的に描く事例が増えていることを指摘した。

図書①②④⑤
上記の論文④で使用した『評論の評論』の世界各国から集められた風刺漫画コーナーを、1906 年から 1930 年まで復刻し、邦語と英語で解説を付した。インドの独立運動や日本の帝国主義など、黄禍論とアジア主義の図像をめぐる風刺と宣伝の相関を明らかにした。解説では、編者ステッドが、ハーグ平和会議で大韓帝国の「密使」に取材して写真入り記事を書き、英領エジプトになぞらえて同情的に紹介していた事実を発掘し、宮本百合子が小説『道標』(194-50)にてモスクワで見たと記す風刺画の事例がまさに収録されていることなどに触れた。

第 3 の目的については、以下の 5 点が挙げられる。

論文⑤
英国の代表的な黄禍論小説である『キモノ』(1921)が、皇太子時代の昭和天皇の訪英時期にあわせて刊行された可能性が明らかになった。日本に駐在していた作者のアシュトン＝ガトキンは、皇太子を接待した外交官であると同時に、日英同盟の存続に否定的な報告書を英国に書いており、『キモノ』はすでに原稿が完成していたゆえに、作者が刊行時期を指定した可能性が高い。日本人女性と英国人貴族の国際結婚を主題にし、稲・ブリンクリーをモデルにした人物を登場させたのも、日本政府の御用新聞とみなされていた父ブリンクリーへのあてこすりと同時に、日英同盟という「国際結婚」が生み出す「混血児」への嫌悪がその底にあると考えられる。『キモノ』の日本での受容については、映画化を懸念する政府と民間の特に廃娼運動者との間で受容の相違が見られた。稲については、交流のあった志賀直哉が「大津順吉」(1912)で描いている関係で注目されてはいたが、『キモノ』に描かれただけではなく、訴訟を検討していたことはこれまで忘れられており、兄のジャックが神智学に接近していた文脈も無視されたままだった。
稲・ブリンクリーについては、学会発表①で、新たな伝記的事項を発掘した。赤井敏夫氏の紹介する久米民十郎資料にある写真（神奈川県立美術館所蔵）が、志賀直哉の記す稲の写真とほぼ一致し、同じである可能性が高いことが判明した。その後、稲は川崎肇との縁談が流れ、リーバ・ブラザースのトーマスと結婚しており、志賀と再会したのは『キモノ』(1921)が関係するらしいことも判明した。

論文②
　マレー半島の最も狭い部分であるクラ地帯を運河によって横断し、英領シンガポールを回避ないし弱体化する計画について、日英で錯綜した言説を整理し、分析した。19 世紀にクラ運河構想として英仏で話題となったものの、事実上、条約で禁止され、日本ではクラ地域への移民が提唱されるも実を結ぶことはなかった。それが 1930 年代になって、日本がクラ運河を開削しているという報道が相次ぎ、外務省が調査したところ、草野心平の父が作成した運河企画書が火種らしいと判明する。以降、クラ運河は黄禍であれ興亜であれ小説でしばしば描かれており、それらの事例を発掘した。そしてつとに警告されていた通り、日本軍はクラ地帯を横断して英領ビルマへ侵攻し、後には鉄道が建設された。クラ地帯を宣伝班として従軍した作家の高見順は、19 世紀に提唱されたクラ地帯への移民を思わせる記述を小説で描いており、クラ運河騒動にまつわる英国の小説『ダーク・ドア』(1940)と期せずして同じ趣向の小説を発表していることを指摘した。

学会発表③④
　英国の公文書館を調査し、ペトリーによる重要な報告書「汎アジア主義運動」の作成に大きく貢献したエージェント P こと、H・P・シャストリの活動を明らかにした。当時、早大教授といわれていたが、学内学会の講師であり、タラクナート・ダス、アタル、サバルワル、リシャール夫妻（ポールとミラ)、大川周明、大杉栄、平沢哲雄、中尾秀男らの詳細な報告を英国政府に送るなど、前田専學の引く回顧録とは大きく食い違う事実が判明した。シャストリは上海に渡って神智学協会の支部代表となり、頓宮寛を会長とするアジア主義団体である大亜細亜協会の副会長に就任し、『大亜雑誌』などを刊行した。しかし、その実、英国政府だけでなく、攪乱か金銭を目的として日本大使館にも情報を提供していたことが判明した。したがって、神智学協会の支部代表にしても、そうすることで神智学協会のインド独立運動の波及を防いでいた可能性が高く、アジア主義団体に所属していたのも、関連の人物や運動を監視し、運動を牽制するためだったと考えられる。同時期に上海を訪問中のタゴールの書簡に、シャストリが登場するのもそうした監視活動の一環であろう。
　あわせて日本滞在中、シャストリが某国密偵と見抜いた中尾秀男についても伝記的事項が判明した。二葉亭四迷の弟子としてロシアで通訳として活躍し、ツィンメルマン事件でドイツの密偵と報道されて後はトルコへ移り、1934 年に田中逸平とメッカ巡礼を果たすことなどが確定できた。調査の副産物として、インド官憲が差し押さえた大川周明の英文原稿「日本における汎アジア主義の精神」を発見した。1917 年 4 月、総合雑誌『モダン・レビュー』への掲載を企図しており、ペトリーの報告でも引用されたことを指摘した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　8　件）

①　橋本順光、欧亜にまたがる露伴－露伴の参照した英文資料とその転用、大阪大学大学院文学研究科紀要、59 巻、2019、55－90

②　橋本順光、マレー半島横断運河計画－クラ地峡をめぐる日英の戦略と宣伝、日本研究論集、18 号、2018、査読有、96-127

③　橋本順光、義経＝ジンギスカン説の輸出と逆輸入－黄禍と興亜のあいだで、『アジア遊学』216「日本文学の翻訳と流通」、勉誠出版、2018、129－145

④　Yorimitsu Hashimoto, Pirates, Piracy and Octopus: From Multi-Armed Monster to Model Minority?, Inaga Shigemi (ed.), A Pirate's View of World History、International Research Center for Japanese Studies, 2017, 37－46

⑤　橋本順光、英国外交官の黄禍論小説－ジョン・パリスの『キモノ』(1921)と裕仁親王の訪英、大阪大学大学院文学研究科紀要、57 巻、2017、1－19

⑥　Yorimitsu Hashimoto, A Modern Symposium? Goldsworthy Lowes Dickinson and Letters from and to a Chinese Official、Anne Tomiche (ed.) Comparative Literature as a Critical Approach, vol.5, Classiques Garnier, 2017, 459－468

⑦　橋本順光、インディアン・ロープ・マジック幻想－幸田露伴から手塚治虫まで、一柳廣孝監修『怪異を魅せる』青弓社、2016、208－230

⑧　橋本順光、上野動物園黒豹脱走事件(1936)とその余響－暹羅派遣経済使節から戦時猛獣処分へ－、日本研究論集、査読有、14 号、2016、96－127

〔学会発表〕（計　8　件）

① 橋本順光、ある「混血児」の肖像－志賀直哉とジョン・パリスに描かれたイネ・ブリンクリー、神戸学院大学人文学部研究推進費公開研究会「久米民十郎の再発見」、神戸学院大学、2019-01-27

② Yorimitsu Hashimoto, Representations of torture across media: Oriental, Medieval or Occidental? ”,“ Literature, Arts, and Media:　Rivalry or Alliance? ”, Institute of Cultural Research, University of Tartu, Estonia, 2018-12-13

③ 橋本順光、戦間期上海における諜報活動－スメドレーとシャストリの交錯、阪大比較文学会公開シンポジウム「比較文学研究に見る‘Trans- ’」、大阪大学、2018-01-26

④ 橋本順光、在日インド人をめぐる諜報活動と神智学－アタル・シャストリ・サバルワル、Japanese Network for Academic Study of Esotericism ワークショップ「アジア・仏教・神智学」、龍谷大学、2017-12-09

⑤ 橋本順光、中国人アメリカ到達説とその環流－メキシコのブッダからインカ皇帝日本人論まで、Japanese Network for Academic Study of Esotericism ワークショップ「文献と経験：秘教思想の領域を探る」、京都大学人文科学研究所、2017-11-19

⑥ Yorimitsu Hashimoto, Obsession with Rat Torture: Attributing Past Inquisition Practices to China, Association for Asian Studies, Annual Conference, Sheraton Centre Hotel (Toronto), Canada, 2017-03-18

⑦ 橋本順光、シンガポール陥落と高浜虚子の「義経」(1942)－義経＝ジンギスカン伝説の新作能への編入、阪大比較文学会シンポジウム「比較文学研究の諸相と文学における都市表象」、大阪大学、2017-01-31

⑧ 橋本順光、鏡を初めて見た夫婦の物語－英国における松山鏡の翻案と民話化、ジャポニスム学会関西例会、京都国立近代美術館、2016-06-26

〔図書〕（計　5　件）

① 橋本順光、エディション・シナプス、万国風刺漫画大全第 4 期別冊日本語解説『評論の評論』の風刺漫画と 1920 年代－プロパガンダとファシズムと女性嫌悪、2018、28

② Yorimitsu Hahsimoto, Edition Synapse, *Caricature and Cartoons: A History of the World, 1921-1930*, 3 volumes, 2018, 1620

③ 橋本順光　他、青弓社、『欧州航路の文化誌―寄港地を読み解く』、2017、232

④ 橋本順光、エディション・シナプス、万国風刺漫画大全第 3 期別冊日本語解説『評論の評論』の風刺漫画にみる第一次世界大戦－W・T・ステッドとハーグ平和会議、2017、16

⑤ Yorimitsu Hahsimoto, Edition Synapse, *Caricatures and Cartoons: A History of the World 1906-1920*, 4 volumes, 2017, 1870

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。